

病害虫発生予察注意報第 5 号

佐賀県

県内各地でタマネギべと病の一次感染株の発生が認められ、また、近年では多発生した平成 28 年に次いで早く、二次感染株の発生を確認しました。発生程度には圃場間差が大きいものの、本病が拡大するリスクが高まっています。については、被害を抑えるために、以下を参考に、防除対策を確実に実施してください。

作物名：タマネギ（早生および中晩生品種）
病害虫名：べと病

1 注意報の内容

発生地域：県内全域

予想される発生量：平年より多い



写真1 一次感染株
(令和 2 年 3 月 2 日撮影)



写真2 二次感染株上の病斑
(令和 2 年 3 月 2 日撮影)

2 注意報発令の根拠

1)現在の発生状況（令和 2 年 3 月 2~3 日調査）

(1)マルチ栽培早生タマネギでの一次感染株

県内 14 圃場を調査した結果、一次感染株の発生圃場率は 21%（前年同時期 25%、平成 28 年同時期 64%）、発生株率は 0.03%（前年同時期 0.02%、平成 28 年同時期 0.92%）で、前年並であり、多発生した平成 28 年より少なかった（表 1、図 1）。

(2)無マルチ栽培中晩生タマネギでの一次感染株

県内 14 圃場を調査した結果、一次感染株の発生圃場率は 50%（前年同時期 36%、平成 28 年同時期 63%）、発生株率は 0.49%（前年同時期 0.26%、平成 28 年同時期 0.28%）で、前年及び平成 28 年より多かった（表 1）。ただし、発生には圃場間差が大きく、全く発生が無い圃場が半数を占める一方で、発生が多い圃場（発生株率 1~4%）が散見された（図 2）。

(3)二次感染株

同調査において、マルチ 2 圃場と無マルチ 1 圃場で、一次感染株からの伝染により病斑を生じた二次感染株の発生を、わずかに認めた（発生株率 0.5～1%）。同調査による近年の二次感染株初確認日と比較すると、本年は多発生した平成 28 年に次いで早い（表 1）。

表1 タマネギべと病の近年の発生状況

調査年	一次感染株(3月上旬調査 ^{注1)})				二次感染株 定期調査での 初確認日 ^{注2)}
	マルチ栽培		無マルチ栽培		
	発生圃場率(%)	発生株率(%)	発生圃場率(%)	発生株率(%)	
令和2年	21	0.03	50	0.49	3/2
平成31年(前年)	25	0.02	36	0.26	3/19
平成30年	40	0.04	10	0.10	4/2
平成29年	45	0.12	33	0.12	4/19
平成28年(多発生)	64	0.92	63	0.28	2/23

注1) 調査は平成31年は3月5日、平成30年は3月6日、平成29年は3月2日、平成28年は3月2日に実施。

注2) マルチ栽培、無マルチ栽培を含む全調査圃場における初確認日。



図1. マルチ栽培14圃場における一次感染株の発生株率

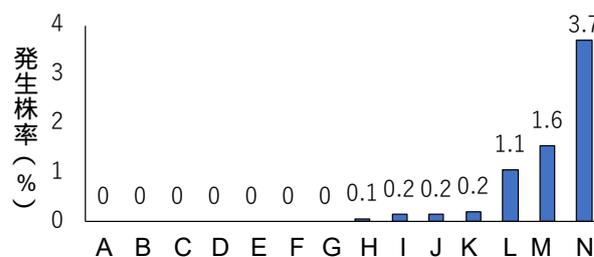


図2. 無マルチ栽培14圃場における一次感染株の発生株率

2)今後の発生予想

- (1)2月28日～3月1日の天候は曇雨天で推移し、べと病菌による感染が助長されたと推定される。したがって、防除が不十分であった圃場では、今後、発病が増加する可能性がある。
- (2)さらに、福岡管区气象台が2月27日に発表した九州北部地方の1か月予報では、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されるものの、天気は数日の周期で変わるとも予想されている。このため、感染に好適な曇雨天が出現し、さらなる感染が助長されると予想される。

3 防除上注意すべき事項

タマネギべと病菌は、周辺圃場まで広く伝染するため、地域全体で防除対策に取り組む。

1)一次感染株の抜き取り徹底

一部圃場で、一次感染株の抜き取りが徹底されず、多発生している。一次感染株は周囲への伝染源となるため、早急に抜き取りを行う。

また、それ以外の圃場においても、発生状況を必ず観察し、発生を認めた場合には直ちに抜き取る。なお、発生は断続的に起こるため、抜き取りはこまめに行う。抜き取った株は放置せず適切に処分する。

2)薬剤防除の徹底（図3、図4参照）

今後の薬剤防除は、効果の高いジマンダイセン水和剤、フロンサイドSCにより実施する。ジマンダイセン水和剤には、ミックスパワー（3000倍）またはまくぴか（5000倍）を展着剤として加用する。なお、使用に当たっては農薬使用基準（収穫前日数、総使用回数等）を遵守する。

【早生タマネギ】（定植日 11月中・下旬、収穫日 5月5～10日を想定）

既に、重点防除期間に入っている。薬剤防除を実施できていない圃場では、ただちに防除を行う。4月上旬まではジマンダイセン水和剤を7日間隔で散布し、4月中旬にフロンサイドSCを散布する（図3）。

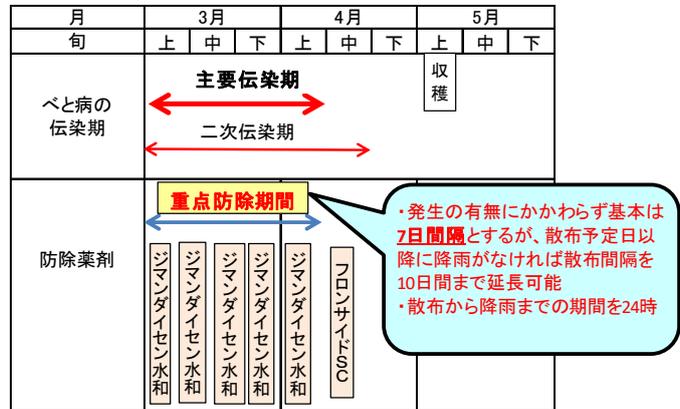


図3 早生タマネギにおけるべと病の伝染時期と薬剤防除体系（例）

【中晩生タマネギ】（定植日 11月下旬、収穫日 5月22～30日を想定）

3月中旬まではフロンサイドSCを、3月下旬から4月下旬までの重点防除期はジマンダイセン水和剤を7日間隔で散布し、5月上旬はフロンサイドSCを散布する。なお、早生品種の収穫中であっても防除を継続する（図4）。

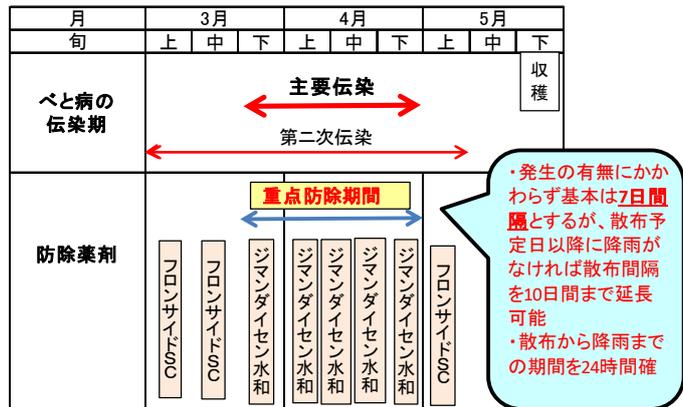


図4 中晩生タマネギにおけるべと病の伝染時期と薬剤防除体系（例）

【各作型共通】

週間天気予報により曇雨天が続くと予想される場合には、降雨前に防除を実施する。重点防除期間の散布間隔は7日間を基本として防除を徹底するが、天気予報により散布予定日以降に降雨がないと判断されれば散布間隔を10日まで延長できる。降雨等により圃場条件が悪く乗用管理機で防除できない場合には、動力噴霧器による手散布で対応する。

3)排水対策の徹底

圃場内に雨水が停滞すると、本病が発生しやすくなるので、溝切り等の排水対策を徹底する。

連絡先: 佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085